小－9

犬のCRP測定に関する回顧的研究

○玉本隆司　足立真実　富田　彬
酪農大伴侶動物医療学

【はじめに】C反応性タンパク（CRP）は犬における主要な急性相タンパクであり、炎症マーカーとして広く臨床応用されている。その生理学的特性から、炎症反応が生じれば血中濃度が上昇するはずであるが、実際には炎症性疾患を有する症例で測定値が正常範囲にとどまったり、逆に非炎症性と考えられる疾患を有する症例で高値を示したりすることがしばしばある。今回我々は、犬血漿サンプルにおけるCRP測定結果を回顧的に検討し、その傾向について調査した。

【材料および方法】2016年２月～2018年５月の間に、酪農学園大学附属動物医療センター内科に初診として来院した犬のうち、CRPを測定し、かつ診断のついた169例を調査対象とした。CRPの測定は富士ドライケムおよびvc-CRP-Pを用いて行った。該当症例について、年齢、性別、犬種といった基礎データのほか、診断名、白血球数および白血球分画、血液生化学の測定データを収集した。

【成績】169例のうち、CRPが0.７mg/dl以下が46例、0.８mg/dl以上が123例であった。診断としては腫瘍性疾患が最も多く、リンパ腫が17例、その他腫瘍が27例であった。リンパ腫は88％（15/17例）、その他腫瘍は81％（22/27例）でCRPが0.８mg/dl以上であった。炎症性疾患では腸炎が14例、肝炎が13例であった。肝炎の84％（11/13例）でCRPが0.８mg/dlであったのに対し、腸炎では50％（７/14例）と低い割合であった。また、症例数は少ないが、鼻炎でCRP上昇は33％（１/３例）、膀胱炎では０％（０/１例）とかなり低い割合を示した。一方で、非炎症性疾患と考えられるクッシング症候群で75％（６/８例）、アジソン病では100％（５/５例）と高い割合でCRPが高値を示していた。

【考察】炎症性疾患においてCRPが上昇しない原因として、一つには事前の治療の影響が考えられる。また、炎症部位の影響も大きいと考えられる。今回は含まれていないが、脳炎などの中枢神経系の炎症性疾患ではCRPが上昇しないことがすでに報告されている。一方で、非炎症性疾患にもかかわらず、CRPが高値を示す原因は未だ不明な点が多い。感染症や炎症性疾患の併発を見逃していることなどが考えられるが、ほぼ全例で基礎疾患の治療のみでCRPは正常化している。今後さらに検討を重ねる必要があるだろう。